

●● 観察者と保育者の対話 (12)

この日は、二学期が始まって間もない九月初旬。保育者は保育経験七年目で、三年保育の年長児二クラスのうちの二クラスを担当している。二クラスの間には壁はなく、年長児計三十九人を二人担任で担当している形態をとっている。観察者と保育者が実践を共有した場面は、登園から昼食前までの、主に子どもたちが好きな遊びを見つけての活動をする時間である。保育者が保育をしながら観て考えていたことと、観察者が観て感じたことの共通点や相違点を両者の対話から明らかにしたいと思っている。

乗った」という気持ちになりました。

……… …保育者から観察者へ

【子どもの発案と保育者の思い】

通園バスに添乗した担任の私に、Aちゃんが「小さい子が本当に食べちゃいそうなハンバーガー屋さんをやりたい」と言ってきました。先週から二学期が始業しましたが、台風の影響で二日間休園となり、私はスタートからうまくリズムに乗れなかったことに少し焦りを感じていました。そんなときの新しい遊びの提案を担任としてはうれしく思い、「よし、その遊びに

二学期前半のねらいは、四週間後の運動会を目指しての活動や、身体を動かして遊ぶことが主流となりますが、同時に本物らしさに目を向けて、工夫したり相談したりして遊びを進めていく経験も大切であると計画していました。そこで私はAちゃんの提案を受け止める、バスの中で相談を始めました。私の今までの経験の中でハンバーガー作りを行ったことがありませんが、今日の保育ですぐに取りかかれるほど準備はできていなかったたので、子どもと話し合い、まずはシェ

イク（スモージー）から作ろうということにまとめて
いきました。

【遊びだしの援助と子ども同士のかかわり】

登園後すぐに準備に取りかかり、トイレットペーパーとのりと水をボウルの中で混ぜて作る方法を提案しました。B君、C君、Dちゃんが「やりたい」と言ってきました。いつもあまりかかわりのないメンバーが遊びのおもしろさに引き寄せられ、集まって活動を進めていきました。徐々にメンバーが増えていき、私はボウルを持ってきたり場所の確保に神経を使ったりしていきました。

メンバーが五人になり、友達が何やら新しいような遊びをしていることに、いろいろな子が興味をもって見に来ました。その中でも仲間入りさせてあげたい子が二人いました。一人はE君で、友達とかわって遊ぶ経験をたくさんさせたいと思っていました。しかしE

君はシェイク作りの様子をじつと見ていましたが、「やってみる？」と私が何度か聞いても、なかなか入ってきませんでした。そこで「水をくんできてほしい」と水差しを手渡し、仕事を頼むと「やってみたくなってきた」と言って仲間入りしました。もう一人はFちゃん、B君と遊ぶことが好きでシェイク作りの様子をずっとちらちらと見ていました。最初に始めた子どもたちが混ぜ終わってシェイクに色をつけるころに「やりたい」と言って入りました。私は、遊びのおもしろさに惹かれて集まってきた、あまりかかわりのなかった七人の子どもたちが、これからハンバーガー屋さんをじっくりと進めていくメンバーになればと思いました。

【子どもからの発案を実現したいという思い】

私は運動会の練習に出かける前にシェイクが完成し、コップに入れてリアルなシェイクができるかもし

れないと思い、色つけのところを手伝いました。シェイク作りのための材料は手近な所にあり、子どもの要求に対してすぐに対応でき、私自身の充実感もありました。シェイクならすぐに本物らしく実現できるといふ思いと、シェイクから出発して遊びを発展させ、明日からはハンバーガーやポテト作りに取り組めるといふ考えが、そのときの私の判断でした。

子どもたちがじっくりと取り組んでいるシェイク作りを通して、メンバーの子どもたちに「こんないいものができちゃった」と感じてほしい、と思いつつかわっていました。また、周囲の子たちにも「こんなことまでできるんだ」という驚きをもつて見てほしいと思っていました。

……… 観察者から保育者へ

今回の観察でいくつか印象に残る場面があり、対話してみたいと思いますが、字数の制約でシェイク作り

の場面に限って述べます。シェイク作りでは、素材の特徴をうまく生かして、子どもたちがうれしそうに割りばしでかき回していました。見ている私も思わず「楽しそう」と気持ちを引きつけられました。

しかし、しだいに、「なぜ、そんなに保育者が動き回るの、材料を集めて回るの」と疑問が生じ、シェイク作りの後、さらにハンバーガーまで作り始めたときには、「なぜそんなに先を急ぐの（この日は、運動会のための一斉活動が計画されていました）、今日はシェイクを作るだけでも時間が足りないくらいではないかしら」という疑問もわいてきました。「二期期が始まったばかりなのだから、もつとゆつくり、一つひとつを楽しめばいいのに」「足りないものがあつたら子どもと一緒に探しに行けばいいのに。探すこと自体が、この子たちには夏休み明けの人間関係を取り戻す上で必要なことだと思う」「お店が完成した場面を、保育者が強く願っていたのではないか」「なぜこ

の活動にばかりかかわるの。隣の机でさつきから集まっているあの女の子たちにも、隣室の男の子たちの遊びにも援助が必要ではないか」と、納得がいかないままビデオを撮り続けていました。

今回、【実践者の気持ち】を丁寧読んでみて、観察後の話し合いで聞いていたのに、感じ取れなかったことがあったと気づきました。それは、先生の気持ちの中の「焦り」や「喜び」「決断」の気持ちです。通園バスの中でAちゃんから提案された新しい遊びを「担任としてうれしく思い」「よし、その遊びに乗った」と思った担任としての心の動きです。この担任の気持ちに私は鈍感でした。観察中はもちろんそのような経過や担任の気持ちを理解することはできませんでしたが、保育後の話し合いでは話題に出ました。しかし、大して気にも留めずにいたのだと思います。

ここに、実践者と観察者の地平の違いがあるように感じます。私自身、担任時代に「観察している人は、

同じ保育を見ているはずなのに、私が見ているものや感じていることはまったく違うものを見たり感じたりしている」と強烈に感じたことがあり、その思いはずっと胸に残っていました。今、そのことに少し説明をつけられる気がします。それぞれの思いや思考の枠組みから逃れようのない人間が、子どもの「シェイク作り」をする動作ではなく、動作のもつ意味世界を観るとき、おのずと違う世界が見えるのは当然ではないかと考えます。そして、保育をしている人と観察者のどちらの見方も認め合い、同じように尊重し合わなければならぬと思います。

保育は続いていく営みです、昨日から明日、朝の通園バスから保育室へ、四週間後には運動会へとつながります。担任はその流れの中で瞬間、瞬間に子どもの思いを受け止め応えています。判断



の優先順位も観察者とは違うのでしょう。観察者(担任)からすると、担任(観察者)は展開しつつある保育をデフォルメして見ている、と言えるかもしれません。

ここまで、「正しい」にばかり目を向けてきましたが、一緒に味わえることもありました。それは子どもが、一所懸命に夢中になって作る様子や、満足した様子、仲間に入るまでの気持ちの揺れ、などです。詳しく書くゆとりはありませんが、子どもに注目して、子どもからの発見を観察者と保育者が一緒に味わうことはできます。けれども、観察者が「保育」の全体に迫ることは難しい、というのが今の気持ちです。

…ふたたび保育者から観察者へ

保育後の話し合いを通して、新たな子ども姿を発見することができました。シエイクを混ぜながら楽しそうに自分も回っているB君や、周りの子を見て何とか自分でやり遂げようとするE君の姿などです。保育

者だけでは見逃してしまう場面も、同じ保育を見ている観察者の違った視点によって新たに子どもから発見することがたくさんありました。

今回、対話を通して私自身問い直したことは、いつの間にか遊びのプロセスを楽しまずに、子どもの目的達成の援助を急ぎ過ぎていたのではないかという点です。その要因はさまざまあると思いますが、私自身の原因として考えてみると、ある程度の保育経験を積んできたということと関係があるように思います。

新任のころは、手立ても見通しもよくわからず、ただがむしゃらに、目の前の子どもから情報を得て、子どもと相談しながら活動を進めていました。今思えば、それが子どもとプロセスを楽しむという点においてはプラスに働いたのかもしれませんが。もちろん当時はその場しのぎのような、ばたばたした保育しかできない自分を歯がゆく思っていました。七年目の今では、遊びを援助するときに、ある程度の見通しをも

ち、目指す遊びの姿をイメージしながら保育している
と思います。今回の対話を通して、無意識のうちに、
私が思い描く遊びの方向に子どもの遊びを引き寄せ過
ぎていて、子どもと考えたり悩んだりして立ち止まる
プロセスを減らしているのかもしれないということに
気づかされました。

保育者は保育の中で子どもに対するさまざまなねら
いを頭に入れながら、変化する状況の中で最善の援助
をしようと考えていますが、その一瞬での判断の基準
が何であったのかは簡単には言えない場合も多くあり
ます。観察者と対話していくことは、その複雑な状況
性を解きほぐし、保育者の判断の基準や思いを浮き彫
りにさせてくれるように思います。地平の違う両者の
対話だからこそ、今まで見えなかったことに気づかさ
れるのだろうと改めて思いました。一つ解きほぐされ
ていくにつれ、まだまだ議論していきたいことがわい
て出てきますが、それが保育者と観察者が同じものを

見て対話するということなのだと思います。

また、時には観察者との対話で、保育者としての至
らなさを痛感したり、「できることならやり直した
い」という気持ちになったりします。このつらさは、
自分の保育を問い直すということが、自分自身の在り
方を問い直すということにつながっているからだと思
います。今回の対話では「急ぎ過ぎる」という、いま
で自分が直面したことのない無意識の課題に気づかさ
れました。このような本質的な問い直しの機会を与え
てくれる対話によってこそ、自分一人では見えてこな
い自分の課題や次に目指す姿が見えてくるのだと思
います。これが保育者にとって対話をすることの大きな
意味だと思います。

保育者 松山洋平（鎌倉女子大学幼稚部）

観察者 岸井慶子（鎌倉女子大学短期大学部）

☆このシリーズは今回で終了いたします。